

「間文化性概念」による「多文化主義」の再構築の試み —空虚なシュミラークルの限界と持続性を求めて—

熊田, 泰章

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

111

(終了ページ / End Page)

125

(発行年 / Year)

2010-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006008>

「間文化性概念」による「多文化主義」の 再構築の試み

——空虚なシュミラークルの限界と持続性を求めて——

(法政大学国際文化学部教授)

熊田泰章

KUMATA Yoshinori

1 序

現在の、あるいはかつてのどの時点であろうとも、そしてグローバルイゼーションという用語が人口に膾炙していきがいが、〈グローバル〉な視点からすると、ある一つの文化は、それがいかに独自性と歴史性を自他共に認めようと、そうでなかろうと、どのような場合であろうとも、他の文化と並置されるのであり、ただし、並置された複数の文化の中で、政治／社会／経済／軍事／宗教などにおいて他への優位性を見出し、それを行使することに巧みである文化が、たとえば他の文化を侵略し、支配し、搾取することはこれまでに数多行われてきたのであるが、しかも、その規模は、その時々におけるサイズの差が常にあるけれども、「地方的規模」から「世界的規模」にまで至るのであり、それが、今現在においてのことを言えば、〈グローバル資本主義〉による〈グローバルな支配〉と言われるものとなるのである。その際に、極めて特徴的であるのは、スラヴォイ・ジジエクが指摘するように、すべての地域文化がもはや宗主国文化と植民地文化に別せられるのではなく、それらすべてがある一つの地域文化としての取り扱いを受け、支配のための対象かつ手段とみなされ、すなわち「植民

地文化」化されるということであって、そこで用いられているのがすべての文化を何らの別なく容認することを標榜する多文化主義なのである^(注1)。

ただし、すべての文化を何らの別なく容認する、ということが、ヨーロッパ中心主義の優位性が脅かされないことを前提としており、しかもその前提は隠蔽されている、というジジエクの論考における重ねての指摘は、ヨーロッパからアメリカへの対抗、そしてまたヨーロッパからアジアへの対抗として有効なものとしての多文化主義という戦略がヨーロッパによって採られていることの指摘として、極めて正しい。しかも、そのヨーロッパの戦略としての多文化主義ということに気付かずに、普遍的な主義としての多文化主義のつもりでそれを共に担ぐことにいそしむ、ヨーロッパにいるのではない者のその行いは、滑稽である。しかしながら、多文化主義以外に、グローバル資本主義に対抗するイデオロギーは存在するのであろうか。多文化主義が、アメリカ中心主義以外のイデオロギーによってグローバル資本主義が遂行されることをめざすための手段としての、すなわち、ヨーロッパ中心主義というイデオロギーによってグローバル資本主義を遂行する手段としてのイデオロギーであることは、ジジエクのこの指摘の通りなのであるが、しかし、そのような、グローバル資本主義を自らのために利用する手段としての多文化主義だけが、多文化主義なのだろうか。グローバル資本主義を肯定すること、そしてそれを支えることを目的とした、グローバル資本主義の一部としての多文化主義ではなく、真に、グローバル資本主義の対抗イデオロギーとしての多文化主義が可能であると言うことはできないのであろうか。

別の言い方にすれば、このことを述べるジジエク自身が、ヨーロッパ中心主義者なのではないだろうか。多文化主義を、ヨーロッパの隠蔽されたたくらみであると論難する時のジジエクは、多文化主義が、ヨーロッパの利益維持というたくらみによって主張されるということ

によって、そうではないたくらみをたくらむそうではない者の存在の可能性を考えてすらいけないのではないか。つまり、非難することによって、非難される者しか存在していないことを前提とし、そして、非難される者しか存在していないと結論するトートロジーに陥っているのではないだろうか。

さて、ジジエクの指摘から一度離れていくことにするならば、そもそも多文化主義を唱える者とは以下の者であるはずだ。多文化主義は、それがそれを唱える者それ自身の存在根拠となっている者によって、そして、自らの属する文化コミュニティおよび自分自身のアイデンティティが、多文化主義を唱えることによって痛むことがないと信じる者によって専ら唱えられている。この2者は、実は、同じ者なのであり、つまり1者である。ということは、すなわち、多文化主義を唱えることによって肯定される複数の文化が相互に侵食して相互に脅かしあうに至るのではないこと、多文化主義を唱えることによって肯定される複数の文化が恒常的に複数であり続けると保障されている状態であること、多文化主義を唱えることによって肯定される複数の文化がその肯定によって生じる力によって支えられ、そのどれ一つとして衰退することのないこと、これらのことを信じる者によって、多文化主義は唱えられるのである。もう一度言えば、多文化主義は、それを唱えることによってその包含するどれか一つの文化が滅びることがあれば、崩壊するものである。ヨーロッパ中心主義者による隠蔽されたヨーロッパ覇権主義としての多文化主義は、すべての文化に存在保証を認めるというその宣言が表面的な美辞麗句に過ぎないのであって、隠蔽されたその欲望がヨーロッパの覇権を希求するものであるのだから、それ自体が自己矛盾なのである。いや、もう一度ジジエクに戻るならば、19世紀的国民国家的帝国主義による世界制覇の欲望が、すべての文化を宗主国文化に統一することとすべての文化を宗主国文化に隷属させることを目指したのに対し、グローバル資本主義による多文

化主義は、ヨーロッパによるヨーロッパのヘゲモニー回復の試みとして唱えられるものであり、多文化主義の名の下に、ヨーロッパの文化を一旦「植民地化」することを通してそこに上位下位があることを否定する身振りを自らが取ることをさらに手段とし、そこで一旦生じるすべての文化が個々のすべての文化のままであることを利用して、ヨーロッパ以外の文化が利益を独占することを妨害し、ヨーロッパを含むいくつかの限定された文化のみが覇権を分割所有することを目指すものである。すなわち、弱者の文化は弱者の文化であり続けるようにその存在を認めるのであり、それによって、強者の、つまりはヨーロッパの文化によるグローバル資本主義の勝利を目指すのである。

しかしながら、この小論の筆者がこれを書くことによって明確にしようとしたのは、ヨーロッパ覇権主義の隠蔽としての多文化主義の本質ということではなかった。そうではなくて、多文化主義を唱える者は、それを唱えることによって、その者自身がヨーロッパであろうとなかろうと、擬似的ヨーロッパたることを自らに仮託し、その擬似的ヨーロッパという利己的な繁栄のみを得ることを希求するのであり、それによって、多文化主義の前提であるところの“多”文化である状態そのものが危ういものとなり、そして、多文化主義の崩壊をもたらすという危険がそこに存することを指摘する、それがこの小論の目的である。

また、この小論において、これから書くことになるのは、以下のことでもある。

多文化主義と文化本質主義との相克は、それによって、ただ一対の対立的概念相互による無限連鎖の後退的否定をもたらすだけであったことを省みるにあたり、これは回避しなければならないものである。多文化主義の相対主義によっては、あまたの文化が存在の対等の権利を有することを肯定する意思の表明はなされても、文化なるものにおける普遍的なるものを指摘することは不可能であることを言うことに

より、そこで一連の思考は停滞する。であるから、多文化が個々の文化の存在の対等の権利行使によってそこにあることが、しかし、その場その場におけるたまたまの羅列の結果としての多文化でしかないことにとどまり、それをただ現状肯定として肯定するというについて、それを止揚する思考の試みとして、この一文は書かれる。

2 多文化主義の限界

何ごとかを目論む時、そこに予め不可能性を感じ得る、ないしは予定する、ないしは措定することを行なうことから、その何ごとかの着手を始めるのであるが、不可能性によって輪郭を施されることによって、不可能性によって限界点が既視可することによって、可能性は初めて定められるのである。何ごとかNを目論む時、何ごとかNマイナス1の不可能性と限界点が何ごとかNの可能性の始まりなのであり、そしてさらに、何ごとかNが無限であることを恐れる恐れが不必要であることを意味するのだが、それ自体の不可能性の始まりにおいて何ごとかNの可能性が終わることが予定されるのである。そして、Nプラス1の可能性と不可能性の連鎖がそこから始まる。

すなわち、多文化主義は、それが不可能性に遮られるに至って、その限界がそこにあったことを示されるのであり、無限に可能であると思ひ込むことは、極めて無謀なことであるにすぎない。ヨーロッパが覇権の座を独占するための延命の方策としての多文化主義は、その多文化主義によって作り出される“多”文化によって、ヨーロッパの覇権の座の独占が不可能になる時に、その限界を迎える。しかし、“多”文化それ自体が、それ自体を覇権の座の独占主としようとするなら、同じロジックによる限界は自ずと予定される^(注2)。独占から共同統治へと転換を図ろうとしても、それが、覇権を目指す限り、その覇権の不可能による限界はまた同じく予定される。覇権を保つための装置と

して用いられるものが、武力であれ経済力であれ政治力であれ宗教力であれ、そしてまた文化力であれ、それは常に不可能性によって区切られる可能性でしかない。

この分析から言えることは、多文化主義が多文化主義をもって対抗した対象に対してその限界を主張したことそのものによって、多文化主義が自らにも限界があることを予め宣言していることである。であるから、多文化主義に限界がないかの如くに振舞うことを止め、その限界を予め明確にすることを、多文化主義を主張することと同時に行っていかなければならない。

3 多文化主義におけるアイデンティティ

多文化主義的世界においては、個々の文化は、それ自体の外部において流通するところの、その個々の文化に対して与えられた「ワタシ」へと同一化を行う遂行性によって「アイデンティティ」を作り出すのであるが^(注3)、この過程は、「外的な対象からの呼びかけ」を存在せしめる〈制度〉への隷属によって初めて可能となるのだし、むしろ、ここで言う「遂行性」は、また、〈制度〉への隷属を同時に作り出すものでもあるのだ。植民地と宗主国から成り立っていた世界が、それら複数の宗主国からの陰謀＝「宗主国のどれか一つが覇権を独占することを不可能にしようとする」によって、多文化主義世界へと転換した時、かつての植民地が植民地としての存在を己が同一性とした時のただその宗主国のみへと向う単一の参照性とは異なり、多文化主義世界の発する「呼びかけ」に対して無数に交差する参照性をもって応えていかなければならない。

「〈ワタシ〉の外にあるファイル」は、多文化主義世界においては、数少ない宗主国が覇権を独占していた時とは異なり、植民地にとって重要なそれが宗主国にのみ存するのではなく、支配＝被支配の構造が

複層化し、参照性の矢印が複数から複数へと伸ばされて交差するのである^(注4)。

最初に戻ると、多文化主義を唱えることがヨーロッパからの新たな覇権への欲望の隠蔽された試みである事態においては、“多”文化相互の間での小さな支配=被支配の呼び声（視線の矢印、参照性の矢印）が不断に、かまびすしく交わされているのであり、「〈ワタシ〉の外にあるファイル」は、参照性の矢印の書き込みであふれているのだが、そのような錯綜した呼び声の横溢する事態の中では、最終的な「制度」の帰結は、小さな制度の重なるの陰に自らを潜ませるのである。

であるから、多文化主義の世界においては、「国家」から個人に至るそれぞれの段階の〈ワタシ〉が、呼び声を交し合う行為遂行性に没頭し、自分についての「〈ワタシ〉の外にあるファイル」が、自分が参照されていることを願う相手の参照ファイル・リストの上位にあることを求めることで、この呼び声の制度に依存する。これを指摘して言うのが、「主体の形成と隷属化（サブジェクション）の過程」なのである。

さらにここで、次のことを述べておきたい。

「ロゴス」の思考上の存在を前提としつつ、その〈「ロゴス」の思考上の存在〉を「言述」によって確証することが〈ロゴス中心主義〉である。すなわち、「神」の神的存在を前提としつつ、その〈「神」の神的存在〉を、人間の言述によって人間が信ずることができるように試みることが宣教者の役割であるように、ロゴス中心主義の哲学者は、本来「ロゴス」が理論的仮定ないしは措定でしかないことを知りつつ、“それが存在しないことはありえない”という言述の論理を構築することを専らとするのである。

それに対して、ジジェクは、「ロゴス」を前提とすることそのものを否定し（否定することそれ自体は、ここでは、もはや前提となっており、それを証明的に述べることは、ここにおいてはなされない）、〈ロ

ゴス」を信じたふりをする振る舞いが流通する」と述べ、その振る舞いには二種類があると述べている^(注5)。

ジジエックが言うのは、小論筆者がまとめておこなうならば、

眼前に存在するのはただの仮象である

仮象が仮象であることは、すでに十分に言われていて、所与である

「ロゴス」は感得できないし、「ロゴス」を前提とする言説＝「ロゴス中心主義」は、もはや無効である

仮象でしかないことを受け入れ、その上で対処する方法は、象徴的なフィクションと想像的なシミュラクルのどちらかしかないのである

ということだ。

その際、「想像的なシミュラクル」は、眼前にリアルな仮象があるのではなく、眼前に仮想世界によって媒介された仮象があることによって、仮象の累乗化が施されていることを指して名指されているのである。仮想世界に媒介された仮象を眼にして、「真性なるもの」を眼にしているかのごとくに振る舞うことを二重に演技することがその意味である。

おとぎの世界は、それが非在であることをすべての人が知っていることを前提に、人為的に構築されたものであり、おとぎの世界を信じているかのように振る舞うことは、おとぎの世界を構築する上での約束事である。これはウソの世界であるが、すべての「ワタシ」がそれを信じているかのごとくに振る舞うことがなければ、ウソの世界に没入することは成り立たないことをすべての「ワタシ」が知っているのである。しかるに、そのようなウソの世界が「ワタシ」の言葉によって語られて構築されていることからさらに事態が進捗し、非在であるはずのおとぎの世界が眼前にあるのを眼にすることになった今、その結果、いやまして信じるふりをするのが求められるのである。こ

ここに至って、信じるふりをし、そのように振る舞うことの行為遂行的積極性が「想像的シミュラクル」によって作り出されるのである。

しかし、そのようにして我々が作り出している社会において我々の感じている居心地の悪さについて、ジジエクと共に考えなければならない^(注6)。

大文字の他者の存在が否定され、すなわち、万人があまねく信じ依拠した「制度」が否定され、それらが肯定されていた時には機能していた規範性が丸ごとそのまま今も機能しているかどうかを常に確認することが必要となり、規範性の機能の一つずつ確認することに日々汲々としているのが現在である。一人の「ワタシ」も。その時々々の状況に応じて確かめられなければならないように、世界の「文化」もまた、“多”文化となるのである。全能の制度／規範／ワタシ／文化が存在しないのであるから、極めて微細なまでに分割された「今・ここ」にのみジャストフィットしたそれらが乱立する以外にないのである。

そこで、ジジエクがその一つについて述べている箇所を引用する^(注7)。

〈社会主義〉が崩壊した後に、「西洋」の資本主義にとって究極的な恐怖の対象であったのは、資本主義の生産性と、〈西洋〉世界にとって異質な社会のモーレスとを束ねながら、独自の資本主義の方法論を語り出すことによって、〈西洋〉を打ち負かしてしまうかもしれない他者的な国民、あるいはエスニック集団であった。1970年代、その恐怖と魅惑の対象は日本であった。それが今や、ほんの僅かのあいだだけ東南アジアに魅惑の眼差しが向けられたのち、注目の視線は、年月を追うごとに、資本主義を〈共産主義〉政治構造と共に組み合わせた国家、次代の超大国としての中国に絞り込まれてきている。

この論述自体が極めて典型的なヨーロッパ中心主義であり、ここで我々はその轍を踏むことを回避し、この論述の中心軸をずらして書くと以下のようになるはずである。

〈西洋〉において〈社会主義〉が崩壊した後に、日本は、大きな制度としては資本主義のみが現前する事態の中で、ここに至るまでの間に資本主義を採用して資本主義のただ中に地位を得ることに汲々としてきたことがひとまず正しかったのだとして一安心するとともに、資本主義世界において勝利者となるためには、「〈西洋〉でありかつ資本主義である世界」の勝利者となることをめざして自らが〈西洋〉化しかつ資本主義の徹底化を行なうことにさらに邁進することを選んだ。その日本からの資本主義の枠組みの中での競争を挑まれた〈西洋〉は、日本が〈西洋〉を模倣する限りにおいてはおおよりにこれを許していたが、完全なる模倣が不完全なる真正を凌ぐに至って、すなわち、日本製小型高性能製品が市場を席卷するに至って、資本主義の〈西洋〉的な生産性が、日本製小型高性能製品がそうであるように、資本主義の〈模倣された西洋〉的な生産性によって現実に凌駕されうることへ恐怖をいだく段階になったのである。その同じ段階は、日本からすると、模倣する対象である〈西洋〉がもはやその生産性において模倣の対象たりえないことを知り、しからは、資本主義の〈模倣された西洋〉的な生産性が独自の資本主義の方法論であることを断じることができるのかどうかについて思案する段階なのであった。ここにおいて、資本主義が単数形のそれから複数形のそれへと転換するかどうかに関し、これまた複数の態度が並存する段階に入ったのである。この段階においてこそ、〈“多”文化主義〉が、グローバル資本主義と並置されるもう一つ別の資本主義として現れることになる。

その際に指摘しなければならないこととしては、「文化産業における生産プロセスの脱実体化あるいは再帰的性格化」^(注8)であるが、これは、基本的なことながら、〈脱実体化＝再帰的性格化〉なのであって、

この産業が、使用価値・交換価値を有する生産物を生産するにあたり、たとえば、ダイヤモンドをふんだんに用いた王冠が、王冠としての象徴的価値を失った場合であっても、最低限ダイヤモンドそれ自体の使用価値・交換価値を有するのに対して、本来それ自体としてはいかなる価値も有し得ない何がしかを、非実体的流通価値のみに依拠して生産することを意味する。再帰的とは、その何がしかの価値は、この文化産業による生産が、その何がしかには価値があるから価値があるというトートロジーによって行なわれることを指すものである。このような段階にある文化産業は、そのような生産物を生産し続けることの無価値性に気付かれることを回避するために、市場を飽和させることにいそしみ、生産物を生産することが自己目的化している状態なのである。

さらに、「文化産業における生産プロセスの脱実体化あるいは再帰的性格化」は、産業が文化産業であることに立ち返るならば、すなわち、産業とは、それが属する文化の中でこそ産業たりえるのであり、〈文化産業〉をアートという商品を生産する産業という意味で用いるのではなく、文化文明という概念において使用するならば、およそ産業とは文化の中で産業たりえるのであり、文化を文化たらしめるのは産業であるのだということをもう一度想起するならば、「文化産業における生産プロセスの脱実体化あるいは再帰的性格化」とは「産業の脱実体化」に他ならないのであり、アート産業において進行する事態とは、卓小な局所的現象ではなく、そもそも産業＝文化文明において遍く進行する事態であるのだ。であるから、引用しておくなら、

近年は「どんなモノでも許されてしまう」展覧会のスタイルが流行し、たとえ四肢を切り刻んだ動物の死骸が館内に陳列されていたとしても、立派な芸術としてまかり通ってしまうような現実は、人間の主体性に巣くう、もっとも極端で病的な嗜好までも植民地化し、資本主義の円環の一部として含みいれてしまおうと欲求

する文化的〈資本〉のなりふりかまわぬさまを曝し出していよう

(注9)

とのジジエクの指摘は、そのまま〈産業=文化文明の全体〉で生じている事態そのものを指すのである。

〈再帰的性格化〉について補足すると、合目的的であることをやめるということでもある。すなわち、「大文字の他者」への奉仕という目的にかなうかどうかを判断の根拠とすることをやめることである、もちろん、「大文字の他者」が存在しないことが明らかとなったが故に。そこにおいて、間主観性を発動させる時、その「間」を成り立たせるはずの〈ワタシ〉の「主観」と参照項としての「主観」が共に空虚なる主体であり、空虚なる主体が空虚な参照を鏡の中の虚像による相互的映しあいとして無限に繰り返す時の無力感こそが「脱実体化」なのである。テキストとしての自己と他者が、「大文字の他者の非在」を「大大文字の他者」のサボタージュとして非難するだけであるならば、この自己と他者は、そこに彼らの感じる無力感に肯定的に立ち向かうことができないのであり、「大文字の他者の非在」への怨嗟が非在であるところの「大文字の他者」に向けられているのみである限り、「大文字の他者」との関係性の構築を求めることは、このまま満たされないままであるという負の連鎖が続くのみなのである^(注10)

4 結び

現代芸術の作品制作と展示の場として、今日では、まさに多文化主義の一つの現前化として機能する多くの現代芸術展ビエンナーレは、「ビエンナーレ」がすでにそのような機能の美術展を表す用語として理解されるに至っている。それらのビエンナーレが、すべてのビエンナーレが相互に似通っていて全体でビエンナーレと呼ばれる同一物になっているとの批判を受け、その批判に対する出している回答がまた

同一のそれになっているが、すなわち、開催される地域との対話的作品ということであり、それらの作品には、共通の前提があると思われる。すなわち、前提とされているのは、

そのビエンナーレの開催される「場所」には、その「場所」に固有とされる〈日常性〉が存在している

しかし、その〈日常性〉なるものは他の場所にある他の日常性との視線の取り交わしから隔離されていて、このある一つの「日常性」の輪郭をなぞることでこの一つの「日常性」を明視化することが、この一つの「日常性」の中では起りえない

そこで、この一つの「日常性」の輪郭の線を太く引くことによってこの一つの「日常性」の固有性を成立させることを、〈外部〉から視線を持ち込むことによって行為遂行的に達成したい

ということである。

だが、この小論において筆者が述べてきたことは、〈外部〉からの視線の持ち込みと言ってしまうならばそこには与件的に外部が存在することになるが、そうではなく、自己と他者の相互行為としての、エクリチュールとレクチュールの同時的行為によるテキストとしての自己と他者の、行為による行為者としての成立である。与件的に予め〈外部〉が存在し、そのような自己との関係性のない他者が〈外部〉としてあることを、現在のグローバル資本主義が否定していることをこの小論では序章から述べてきた。グローバル資本主義の第一テーゼとしての「多文化主義」においては、グローバルな規模で通時的・共時的に多数・複数の文化の並立が称揚され、それによって、しかし、世界が様々な〈外部〉に分断されるのではなく、むしろ、並立する“多”文化によってすべてが内部化した世界となることがグローバル資本主義にとって好都合であるのだ。そこにおいては、テキストとしての多様性は、多様なテキストが相互参照可能であるためのモノコード体系化によって作られるのである^(注11)。

このようにしてすべてが内部化した時に、利害の不一致は、〈内部〉対〈外部〉で生起するのはなく、当然ながら、〈内部〉の中における、〈内部〉を構成するところの自己と他者の間で起るのであり、〈内部〉を構成する自己と他者は〈内部〉における関係性の構築による行為遂行的に存在を獲得するのであるから、そのような他者との関係性構築が、相互の否定による衝突として行なわれることは、〈内部〉が〈内部〉として崩壊することを意味するのであり、利害の不一致を勝者による利の独占として結果する解決に至らしめることは、矛盾する方策となるのである。すなわち、「多文化主義」は、真に、すべての文化が関係性を相互行為遂行的に結ぶことが持続的に行われることを前提とするものなのであり、そのさらに前提となるのが、個々の主体が、視線の取り交わしによる主体と客体の相互的アイデンティティの作り出しを、「大文字の他者の非在」による空虚という否定として受け止めるのではなく、「大文字の他者の非在」によって新たな可能性の段階に入ったことを肯定することなのである。このような関係性構築の行為遂行的に自己と他者とが同時的に存在化することは、リクルの述べる「物語的自己同一性」の可能性的複数性^(注12)を包含するのであり、物語自己同一性が決して唯一のそれとして完成することがなく、常に新たな物語性によって更新され続ける行為遂行性と表裏一体をなすものであるように、原則的な不安定性を肯定することを引き受けつつ、それを持続的に遂行し続けることを我々に求めるのである。

注

- 1 スラヴォイ・ジジェク『厄介なる主体1－政治的存在論の空虚な中心』鈴木俊弘・増田久美子訳、青土社、2005年、385頁
- 2 スラヴォイ・ジジェク『厄介なる主体2－政治的存在論の空虚な中心』鈴木俊弘・増田久美子訳、青土社、2007年、17頁
- 3 同上、31頁
- 4 「外在性」については、以下の拙論で詳述した。
拙論「それ自体であることの円環－テキストとしての自己と他者－」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第9号論文編、2008年
- 5 ジジェク『厄介なる主体2－政治的存在論の空虚な中心』、172頁
- 6 同上、203頁
- 7 同上、232頁
- 8 同上、234頁
- 9 同上、上掲頁
- 10 上掲の拙論、67頁
- 11 ミシェル・フーコー『マネの絵画』阿部崇訳、筑摩書房、2006年、44頁
- 12 ポール・リクール『時間と物語Ⅲ－物語られる時間』久米博訳、新曜社、1990年、452頁